

急ぎ過ぎだよ 人類は。

ゆるやかなネットワークを目指す

ITより
逢いてエ

雑報 縄文

いろんな考えがあるから面白い
いろんな人がいるから楽しい

No. 699

2025年4月

編集・発行 鈴木厚正

〒266-0005 千葉県緑区菅田町2-21-359

T&F 043-291-2917

も・く・じ

- | | |
|------------------|----|
| • 「寂聴97歳の遺言」ほか | 2 |
| • お便りから | 6 |
| • 斑尾高原スキー&スノーシュー | 14 |
| • 寺泊住吉屋 | 16 |
| • 有機農業者と消費者の集い | 20 |
| • 山仕事(3月、薄場) | 24 |
| • け・い・じ・ば・ん | 26 |

心はいつも
山頭火

泉ゆきを
書画



泉ゆきを『心はいつも山頭火』
日本習字普及会

メール配信をご希望の方は、
<suzukikosei.san@gmail.com>へ。
三宅伊都子さんが
応対して下さいます。

題 字 敬 佐村隆英和尚 (千葉県長柄町本光寺住職)
カ ッ ト 敬 泉ゆきをさん (にっぽん箱絵の会会長)

印刷機 リソグラフ RZ 330

※この号の切手は、グリーティング巻。

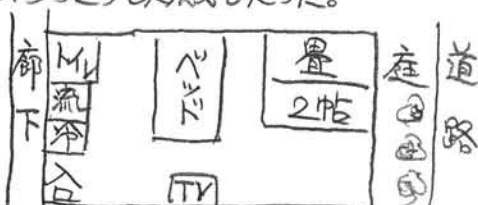
山仕事(3月、薄場)

3月6日(土)、くもり。東京駅地下の「まい泉」で、カキフライとカツサンドを購入。「たま」は空いていた。

救急車で久米さんに迎えられ、車で浜松市の聖隷三才病院へ。^{せいれいみかたはら}山崎さんは休み、若林さんは明日から、竹中さんは午後用事とあって、康江、原田さんとぼくの計4名だ。意外に遠く、/時間ほどかかった。大きな病院で、ホスピス棟はその端にある。

正士さんは、1月、2月の頃より元気に見えた。康江さんが後刻、「きれいだった」と言った。確かに、身なりも家に居た時よりきちんとし、すっきりした感じだった。

部屋は個室。ベッドのほかに入浴器のような2畳敷がある。家族が泊まる場合もあるのだろう。廊下を背にして小さいが流し台と冷蔵庫があり、自炊も可能。床暖房もあり、なまじのビジネスホテルは顔負けだ。



以前は外出や訪問も自由だったが、「コロナ」以後、出入りが厳しくなったという。今回の訪問も、医師が仲々うんと言わず、「山仕事の打ち合わせ」ということでやっと許可が出たそうだ。人数も、当初は2名までと言われたが、正士さんが粘り、2名が3名、さらに4名まで認めさせたという。正士さんの粘りが目に見えるようだ。その後、溝口久さんからも見舞いの希望があったが、頑として応じなかったらしい。悪いね久さん。

いろいろ話をきいた。食事はもちろん、風呂もちゃんと入れてくれ、当面不自由はないようだ。正士さんらしく、パソコンを持ち込んで確定申告の作業をしようとしたが、10万円以下の場合には申告不用ときいてほとした。それでも暇がないと、正士さん。

面会時間は15分ということだったが、とくに注意もなく/時間が経過した。別れ際、3月13日で66歳になる正士さんに、久米さんの音頭でハッピー・バースデーを合唱。おまけに「四捨五入すると七寿ね」と久米さん。また会えるといいね。

帰り道。遠鉄ストアで買物をし、16時過ぎ正士さん宅着。啓史さんから金庫を預り、ほぼ以前と同様に利用できるようになったのがありがたい。

短い時間で康江、久米さんが夕食を調べてくれた。その頃には竹中さんも到着。

(夕) 刺身(カツオ、メバチマグロ)、天ぷら(フキノトウ、竹の子、舞茸)、鳥じん(以前、熊谷道子さんから頂いた南信名物。鶏肉と野菜をそのまま炒めるようになってる)、白菜漬け。

20時頃、蕎麦帰りの啓史さんも参加。回を重ねる毎に打ち解けてくるのが嬉しい。夜は3人。ゆっくり寝る。だが、夜中3度足がツリ、困った。


京都の前田聡さんが送ってくれたピフイチマップを、原田さんと竹中さんに託し、研究してもらう。本、『琵琶湖』は、原田さん—竹中さんと同覧の後、お返します。

3月7日(金)、晴。心配した風もなく、ありがたい。

いつものように6時、母屋へ行く。新聞がないのが残念で、テレビを見る。こうして、たまには家に風を入れるのがよいと啓史さんも分かってきている。

例によって6:30、原田さんが朝食を用意してくれ、若林さんと4人で食べる。

食後、若林さんの車で薄場の竹中さん宅へ。康江さんは冬米さん宅へと別れる。

今日は、竹中さんの母屋奥にある小屋の取り壊し作業だ。母屋の裏、蔵と竹ヤブの間に、2×4間(8坪)ほどの小屋がある。立っているというより、図のように傾いている。すでに周囲の壁材は


とリ除かれており、内部には古材がうず高く積まれている。一度に引き倒すと危険なので、竹中さんの計画に従い外側から少しずつ取り壊していく。ぼくは、こうした「ぶっ壊す」ことが大好きだ。政治の世界にもそんな人が居たっけ。

屋根材はすでに撤去されており、もき出しとなった^{ススキ}垂木をブルーシートがおおっている。そのシートもボロボロだ。垂木を固定しているのは、和釘だった。針金をブツブツ切った洋釘と違って、和釘は鍛造する。現在では、木造船が社寺にしか使われていないようだ。改めて見ると、小さな建物にしては柱も梁もしっかりしている。ほどほどの住まいだったのだろう。

垂木は、下から掛け矢を振り上げて外す。柱は根元が腐っており、腐った部分を切断した後、ロープをかけて4人で引き倒す。次々に出る廃材は、母屋の軒下を通して軽トラックに積み込む。ふんはいっぱい廃材を持つが、ぼくはその半分ほど。力の差がありすぎる。

11時頃、水窪(みくぼ。もう覚えてくれたかな)から母屋千づるさんと中谷今朝菊さんがご馳走を持って見えた。熊谷道子さんは葬儀で、竹中礼子さんは夫君と通院で来られなかったとのこと。冬米さんの座敷に8人が揃っていた。

(昼)手巻ずし(マグロ赤身、中トロ、ヒラメ、イカ、トビコ、すき身)。

メサバ、切り干し大根の煮付、こんにゃくの油炒め、人参と大根

の酢漬けに熊谷道子さんのポテトサラダという豪華版だ。水窪は山の中なのに、どうして鮮度のよい魚が買えるのだろう。

デザートは、内田美智子さん(埼玉・川越市)からのお饅頭。意地汚いぼくは、またも食べ過ぎた。

午後も作業を続け、小屋の姿は消え失せた。

廃材は、使えそうなものは庭に残し、大部分は一段下の空地に運び後日、少しずつ燃やす。トタンやブルーシートは分別して後日、処理を依頼する。残るは土砂に混じった細かい木っ端くらい。これは明日、桜の下に撒布の予定。

16時、作業をやめ、皆で「あらたまの湯」へ。

湯から正士さんちに帰り、久米さん、康江さんが手早く用意してくれた夕食。

(夕) 新玉ネギのスープ煮、ブリの照り焼、カブの甘酢漬け、白菜とキクラゲの中華炒めとおにぎり。

5月、水曜で茶摘みの手伝いをしようかと、話が出る。康江さんは、熊谷さんが育てている千里ゴマの花を見て「石本」のつぶしよくもたべたいという。

賑やかな夜だが、なんだか足りないような……。

5月9日(土)、くもり。若林さんの車で薄場へ。庭に置いた柱など大きな廃材は、チェーンソーで腐った部分をカットし、畑や果樹園に行くときの階段用にとって置き、使えない部分は焼却場所に。原因さんとぼくが担当。木っ端のまじった土砂は、竹中さんと若林さんが。(カッパ)

11時、あらまた片付いた。すごいカだ。これで猫の手クラブは、家屋解体とまたひとつウイングを上げた。

(昼) カレーライスに、サラダと玉子焼。

敷地駅に向かう途中、西田さんの自宅へ。娘さん(といっても60以上か)が出て、90歳のお母さんが「メレンゲのカキとクリ園を刈ってほしい」とのこと。

敷地駅で久米、竹中、若林さんに見送られる。このあと、正士さんちに帰り、掃除と戸締まりをしてくださるのだ。